

東京・埼玉支部だより

2022年7月



Concert Review

2022.7.18 (月・祝) 彩の国さいたま芸術劇場

「ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.144 三浦謙司ピアノ・リサイタル」

プログラム

J.S.バッハ：協奏曲ニ短調

ハイドン：ソナタ第50番

J.S.バッハ：幻想曲とフーガ

メンデルスゾーン：厳格な変奏曲

J.S.バッハ：イタリア協奏曲

ワグナー（リスト編曲）：イゾルデの愛の死

ストラビンスキー：「ペトルーシュカ」からの3楽章

～アンコール曲～

A.リャードフ：3つの小品 第1番 前奏曲 op.11-1

T.ハマシアン：Fiders T ua

B.ゴダール：マズルカ第2番 op.54-2

最初から惹きつけられる美しい音で、一音一音とてもきれいに響いている上に、フレーズが自然に流れていて、弱音もとても優しく綺麗でしたが、速い曲やパワフルな曲もとてもダイナミックで素晴らしい演奏でした。

バッハからストラビンスキーまで幅広いジャンルでしたが、難曲を、そう感じさせない曲想豊かな演奏で、スタミナもお有りなのか、それと感じさせないテクニックと集中力がお有りなのだと思います。

会場の音響も相まって本当に素晴らしい演奏会でした。

アンコールは、3曲共にあまり弾かれない曲だと思いますが、とても良かったです。

三浦さんから、もうこれで終わりという合図があるまで、お客様の拍手が鳴り止まなかったです。

(豊國由美子先生)

2019年ロン・ティボー・クレスパン国際コンクール優勝の経歴を持つ三浦謙司さんの演奏は期待通りのとにかく素晴らしい演奏でした。

J.S.バッハの作品と彼の音楽に影響を受けた作曲家—ハイドン、ワグナー、ストラビンスキーの作品を交互に演奏し、アンコール曲に至ってもバッハの影響を受けた作品というこだわりのプログラムは、流石です。

インタビューで三浦さんが仰っていた言葉「『バッハがどれほど愛情に溢れた人で作品がどれほど人間らしくドラマチックか』を伝えたい」との仰せも素敵ですが、仰っていた言葉通りの演奏は脱帽です。

その思いが忠実に伝わってきたのは、1曲目のバッハ 協奏曲。

スタンウェイのピアノが、パイプオルガンの音に聴こえてきたことです。

以後、2曲目～7曲目、アンコール曲に至るまでいずれも一音一音が輝いていて音がもの凄く綺麗！左ペダルの使い方も絶妙でした。

ワグナーからストラビンスキーの移行時は一瞬呼吸をしていないのでは...という位勢いがあったのもさすがです。

久々に素晴らしいピアニストの音を聴くことが出来て大満足でP.I.Aで育った生徒が、こんな逸材の素晴らしいピアニストに成長されたことは、何とも嬉しい限りです

(手嶋邦子先生)